



TITLE:

アソシエーションスキームの半直積とクリフォード理論 (代数的組合せ論)

AUTHOR(S):

花木, 章秀

CITATION:

花木, 章秀. アソシエーションスキームの半直積とクリフォード理論 (代数的組合せ論). 数理解析研究所講究録 2004, 1394: 52-60

ISSUE DATE:

2004-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/25905>

RIGHT:

アソシエーションスキームの半直積と クリフォード理論

信州大学・理学部 花木 章秀 (Akihide Hanaki)
Department of Mathematical Sciences,
Faculty of Science, Shinshu University

1 はじめに

(可換とは限らない) アソシエーションスキームの表現論を考えると、有限群の表現に対して知られていることが、どのように一般化されるかを考えるのは自然なことである。ここでは有限群の指標 (表現) に対して知られている Clifford 理論がアソシエーションスキームに対して成り立つのかどうかを考える。

記号や定義は Zieschang [6] と同じものを用いる。また講義ノート [4] も参考にして頂きたい。アソシエーションスキームの具体例は as12-40 のように表すことにするが、これは [5] の分類表の位数 12 の 40 番目という意味である。[5] では多くの具体例とその指標表を確認することができる。

講演では group-graded algebra という言葉を Curtis - Reiner [1] にしたがって用いたが、土井幸雄氏 (岡山大) に標準的ではないとのコメントを頂いたため、この報告集では Dade [2] にしたがった用語に変更した。講演時にも言ったが、タイトルは講演の前半部分を示しており、不適切と思われるがご容赦願いたい。

まず有限群とその正規部分群に関する Clifford の定理を確認しておこう。 G を有限群とし H をその正規部分群とする。 $\varphi \in \text{Irr}(H)$ と $g \in G$ に対して

$$\varphi^g(h) := \varphi(ghg^{-1})$$

で φ^g を定めれば $\varphi^g \in \text{Irr}(H)$ である。

$$T := \{g \in G \mid \varphi = \varphi^g\}$$

とおく。 $\text{Irr}(G \mid \varphi)$ で、 G の既約指標でその H への制限が φ を既約因子に含むもの全体を表す。このとき次が成り立つ。

Theorem 1.1 (Clifford). (1) $\text{Irr}(T \mid \varphi) \rightarrow \text{Irr}(G \mid \varphi)$ ($\eta \mapsto \eta^G$) は全単射である。

- (2) $\chi \in \text{Irr}(G \mid \varphi)$ に対して、ある自然数 e があって $\chi_H = e \sum_{t \in T \setminus G} \varphi^t$ である。
- (3) ある $\chi \in \text{Irr}(G \mid \varphi)$ があって $\chi_H = \varphi$ ならば $\text{Irr}(G \mid \varphi) = \{\chi\tau \mid \tau \in \text{Irr}(G/H)\}$ である。

アソシエーションスキームにおいて、有限群の正規部分群に対応する概念として normal closed subset というものがある。Normal closed subset に対して Clifford 型の定理が成り立つことを期待したが、次のように反例がある。

Example 1.2 (as12-40). as12-40 の指標表は以下の通りである。

	g_0	g_1	g_2	g_3	g_4	g_5	g_6	m_i
χ_1	1	1	2	2	2	2	2	1
χ_2	1	1	2	-1	-1	-1	-1	2
χ_3	1	-1	0	-1	-1	1	1	3
χ_4	2	0	-2	1	1	-1	-1	3

$H := \{g_0, g_1, g_2\} \triangleleft G$ であり、 H の指標表は

	g_0	g_1	g_2	m_i
φ_1	1	1	2	1
φ_2	1	1	-2	1
φ_3	1	-1	0	2

である。

$$\begin{aligned} (\chi_1)_H &= \varphi_1, & (\chi_2)_H &= \varphi_1, \\ (\chi_3)_H &= \varphi_3, & (\chi_4)_H &= \varphi_2 + \varphi_3. \end{aligned}$$

であることが確認でき Clifford 型の定理は成り立たないことが分かる。

この例から Clifford 型の定理のためには normal という条件は弱すぎるということが分かる。アソシエーションスキームにはもう一つ **strongly normal** という概念があり、有限群の場合には normal であることと strongly normal であることは同値である。そこで strongly normal closed subset について Clifford 型の定理が成り立つことを期待する。一般の場合には今のところ未解決で、この講演では可換なアソシエーションスキームとその strongly normal closed subset に対して Clifford 型の定理が成り立つことを紹介した。

2 アソシエーションスキームの半直積

まずは、非常に特別な場合を考える。Zieschang [6] で定義しているアソシエーションスキームの半直積の場合である。

(X, G) をアソシエーションスキームとし θ を有限群とする。また準同型 $\theta \rightarrow \text{Aut}(X, G)$ が与えられ θ が (X, G) へ作用しているものとする。このとき半直積 $(X, G)\theta$ を以下のように定義する。集合としては $(X, G)\theta = (X \times \theta, G \times \theta)$ であり、関係は

$$((x, \zeta), (y, \eta)) \in (g, \theta) \stackrel{\text{def}}{\iff} (y\theta, z) \in g, \zeta\theta = \eta$$

によって定める。半直積はアソシエーションスキームの条件を満たし、その構造定数 (intersection number) は以下ようになる。

$$p_{(d, \varepsilon)(e, \zeta)}^{(f, \eta)} = \delta_{\varepsilon \zeta, \eta} p_{d \zeta, e}^f$$

$\sigma_g, \sigma_{(g, \zeta)}$ をそれぞれ $g \in G, (g, \zeta) \in G \times \theta$ の隣接行列とする。構造定数に関する式から $\sigma_{(g, \zeta)}$ を $\zeta \sigma_g$ と書けば

$$\sigma_g \zeta = \zeta \sigma_{g\zeta}$$

であり、それ以外の積は矛盾なく定義されることが分かる。これは半直積 $(X, G)\theta$ の隣接代数が θ の (X, G) の隣接代数上の skew group ring であることを意味している。Skew group ring に対して Clifford 型の定理が成り立つことが知られているが、より一般に、次の節で説明する crossed product について同様の定理が成り立つ。

3 Group-graded algebra と crossed product

ここでは Dade の論文 [2] にしたがって group-graded algebra に関する説明をする。簡単のため、考える環は代数閉体 F 上の有限次元 algebra のみとし、また加群も F 上有限次元のもののみを考える。Algebra は単位元をもつものとする。

S を有限群とする。 F -algebra A が $A = \bigoplus_{s \in S} A_s$ と F -subspace の直和に分解していて

$$(1) A_s A_t \subseteq A_{st} \text{ for } s, t \in S$$

を満たすとき A を S -graded algebra という。 A が S -graded algebra であれば A_1 はその F -subalgebra である。ここで等号が成り立つとき、すなわち

$$(2) A_s A_t = A_{st} \text{ for } s, t \in S$$

であるとき A を strongly S -graded algebra という。また S -graded algebra A が

$$(3) \text{ 任意の } s \in S \text{ に対して } A_s \text{ は } A \text{ の unit } a_s \text{ を含む}$$

という条件を満たせば、 S が有限群であることなどから、これは (2) の条件を満たす。(3) を満たす S -graded algebra は有限群 S の環 A_1 上の crossed product として表されることが知られている [2, Theorem 5.10]. A が crossed product であれば A は右加群と見ても、左加群と見ても A_1 -free で free basis として $\{a_s \mid s \in S\}$ を取ることができる。以下で crossed product に関する Clifford 理論を簡単に説明する。この部分を理解するためだけならば Dade [2] よりも Curtis – Reiner [1, §11] の方が分かりやすいと思う。

A を crossed product とし $a_s \in A_s$ を A の unit とする。既約右 A_1 -加群 L 対して

$$L^A = L \otimes_{A_1} A = \bigoplus_{s \in S} L \otimes A_s = \bigoplus_{s \in S} L \otimes a_s$$

であり $L \otimes a_s$ は右 A_1 -加群である。また $a'_s \in A_s$ も unit であるとする $L \otimes a_s \cong L \otimes a'_s$ が成り立つ。よって

$$T := \{t \in S \mid L \otimes a_s \cong L\}$$

は well-defined で S の部分群になる。このとき次が成り立つ。

Theorem 3.1 (Clifford Theorem for Crossed Products). A を crossed product とし上の記号を用いる。 M を既約右 A -加群とし L を M_{A_1} の既約部分加群とする。 $T := \{t \in S \mid L \otimes a_s \cong L\}$ とおくと次が成り立つ。

- (1) M_{A_1} は semisimple で、ある自然数 e に対して $M_{A_1} = e \bigoplus_{t \in T \setminus S} L \otimes a_t$ である。
- (2) $B := \sum_{t \in T} A_t$ とおく。このとき $\text{Irr}(B \mid L) \rightarrow \text{Irr}(A \mid L) \quad (N \mapsto N^A)$ は全単射である。

アソシエーションスキームの半直積 $(X, G) \rtimes \theta$ の隣接代数が θ の FG 上の crossed product であることは明らかである。よってこれについて Clifford 型の定理が成り立つ。また半直積でなくても以下のように crossed product となる例はたくさん存在する。

(X, G) をアソシエーションスキームとし H を G の strongly normal closed subset とする。すなわち剰余スキーム $(X/H, G//H)$ が thin (本質的に有限群) であるとする。このとき $G = \bigcup_{gH \in G//H} HgH$ は G の分割になる。

$$\mathbb{C}G = \bigoplus_{gH \in G//H} \mathbb{C}(HgH)$$

は自然に $G//H$ -graded algebra である。ただし $K \subset G$ に対して $\mathbb{C}K = \bigoplus_{g \in K} \mathbb{C}\sigma_g \subset \mathbb{C}G$ であるとする。一般にこれは crossed product ではないが、各 $\mathbb{C}(HgH)$ が unit を含めば crossed product である。Crossed product であれば $|H| = |HgH|$ が任意の $g \in G$ に対して成り立ち、また (X, G) が可換のときはこの逆も正しいことが後で示される。非可換の場合に逆が正しいかどうかは、今のところ分からない。

Example 3.2 (半直積でない crossed product, as14-7).

$$\left(\begin{array}{cccccc|cccccc} 0 & 1 & 1 & 1 & 1 & 1 & 1 & 2 & 2 & 2 & 3 & 3 & 3 & 3 \\ 1 & 0 & 1 & 1 & 1 & 1 & 1 & 3 & 3 & 2 & 2 & 2 & 3 & 3 \\ 1 & 1 & 0 & 1 & 1 & 1 & 1 & 2 & 3 & 3 & 3 & 2 & 2 & 3 \\ 1 & 1 & 1 & 0 & 1 & 1 & 1 & 2 & 3 & 3 & 2 & 3 & 3 & 2 \\ 1 & 1 & 1 & 1 & 0 & 1 & 1 & 3 & 2 & 3 & 3 & 2 & 3 & 2 \\ 1 & 1 & 1 & 1 & 1 & 0 & 1 & 3 & 3 & 2 & 3 & 3 & 2 & 2 \\ 1 & 1 & 1 & 1 & 1 & 1 & 0 & 3 & 2 & 3 & 2 & 3 & 2 & 3 \\ \hline 2 & 3 & 2 & 2 & 3 & 3 & 3 & 0 & 1 & 1 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 2 & 3 & 3 & 3 & 2 & 3 & 2 & 1 & 0 & 1 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 2 & 2 & 3 & 3 & 3 & 2 & 3 & 1 & 1 & 0 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 3 & 2 & 3 & 2 & 3 & 3 & 2 & 1 & 1 & 1 & 0 & 1 & 1 & 1 \\ 3 & 2 & 2 & 3 & 2 & 3 & 3 & 1 & 1 & 1 & 1 & 0 & 1 & 1 \\ 3 & 3 & 2 & 3 & 3 & 2 & 2 & 1 & 1 & 1 & 1 & 1 & 0 & 1 \\ 3 & 3 & 3 & 2 & 2 & 2 & 3 & 1 & 1 & 1 & 1 & 1 & 1 & 0 \end{array} \right)$$

で定義されるアソシエーションスキームは半直積で書くことはできないが crossed product で表される。したがって Clifford 型の定理が成り立ち、指標表は以下の通りである。

	g_0	g_1	g_2	g_3	m_i
χ_1	1	6	3	4	1
χ_2	1	6	-3	-4	1
χ_3	1	-1	$\sqrt{2}$	$-\sqrt{2}$	6
χ_4	1	-1	$-\sqrt{2}$	$\sqrt{2}$	6

4 可換アソシエーションスキームに対する Clifford 理論

前の節では隣接代数が crossed product になるという強い条件の元で Clifford 型の定理を考えた。より一般の場合にはどのようなになっているであろうか。まずは簡単な例を見てみる。

Example 4.1 (crossed product でない場合, $\text{as06-5} \subset \text{as12-39} \subset \text{as24-360}$). as24-360 は以下の指標表をもつ。

	g_0	g_1	g_2	g_3	g_4	g_5	g_6	g_7	g_8	m_i
χ_1	1	1	2	2	2	2	2	6	6	1
χ_2	1	1	2	2	-2	-2	-2	-6	6	1
χ_3	1	1	2	2	-2	-2	-2	6	-6	1
χ_4	1	1	2	2	2	2	2	-6	-6	1
χ_5	1	1	-1	-1	-2	1	1	0	0	4
χ_6	1	1	-1	-1	2	-1	-1	0	0	4
χ_7	1	-1	-1	1	0	$\sqrt{-3}$	$-\sqrt{-3}$	0	0	4
χ_8	1	-1	-1	1	0	$-\sqrt{-3}$	$\sqrt{-3}$	0	0	4
χ_9	1	-1	2	-2	0	0	0	0	0	4

$H = \{g_0, g_1, g_2, g_3\}$, $K = \{g_0, g_1, \dots, g_6\}$ とすると H , K は共に strongly normal である。 χ_1, \dots, χ_4 の上では crossed product の場合と同じように Clifford 型の定理が成り立っている。 χ_9 は H の外では値が 0 となっている。 χ_5, χ_6 の上では K までは Clifford 型の定理が成り立っているように見えるが K の外では値が 0 となっている。 χ_7, χ_8 も同様である。

この例で見たような状況が一般のアソシエーションスキームとその strongly normal closed subset に対して成り立つことを期待しているが、今のところ可換の場合しか証明は出来ていない。以下では可換アソシエーションスキームのみを考える。

(X, G) を可換アソシエーションスキームとし H をその strongly normal closed subset とする。Example 4.1 から考えると、algebra 全体を見るのではなく H の既約指標ごとに見た方が良いように感じられる。そこで $\varphi \in \text{Irr}(H)$ に対して、対応する primitive idempotent を e_φ とし

$$CH = \bigoplus_{\varphi \in \text{Irr}(H)} e_\varphi CH, \quad CG = \bigoplus_{\varphi \in \text{Irr}(H)} e_\varphi CG$$

なる直和分解を考える。可換性を仮定しているので、どちらも両側イデアルの直和である。また自然に $\text{Irr}(e_\varphi \mathbb{C}H) = \{\varphi\}$, $\text{Irr}(G | \varphi) = \text{Irr}(e_\varphi \mathbb{C}G)$ であるからこの二つの algebra の間で Clifford 型の対応をみれば良い。

$$e_\varphi \mathbb{C}G = \bigoplus_{g^H \in G//H} e_\varphi \mathbb{C}(HgH)$$

と分解することによって $e_\varphi \mathbb{C}G$ は $G//H$ -graded になる。Example 4.1 から考えて

$$Z//H := \{g^H \in G//H \mid e_\varphi \mathbb{C}(HgH) \neq 0\}$$

とおく。このとき次の Lemma が成り立つ。

Lemma 4.2. 次は同値である。

- (1) $e_\varphi \mathbb{C}(HgH) \neq 0$ である。
- (2) ある $f \in HgH$ に対して $e_\varphi \sigma_f \neq 0$ である。
- (3) $e_\varphi \mathbb{C}(HgH)$ は $e_\varphi \mathbb{C}G$ の unit を含む。
- (4) ある $f \in HgH$ に対して $e_\varphi \sigma_f$ は $e_\varphi \mathbb{C}G$ の unit である。

Lemma の証明のために一つの結果を紹介しておく。

Theorem 4.3 ([3, Theorem 3.3, 3.4], [4, 定理 8.4]). H を G の strongly normal closed subset とする。 χ を G の指標、 τ を $G//H$ の指標とすると

$$\chi\tau(\sigma_g) := \chi(\sigma_g)\tau(\sigma_{g^H})$$

で指標の積を定義すれば、これはまた G の指標になる。特に $\chi \in \text{Irr}(G)$, $\tau(1) = 1$ であれば $\chi\tau \in \text{Irr}(G)$ であり、重複度に関しては $m_\chi = m_{\chi\tau}$ が成り立つ。

Proof of Lemma 4.2. (4) \Rightarrow (3) \Rightarrow (1) \Rightarrow (2) は自明である。(2) を仮定して (4) を示す。このとき可換性から、ある $\chi \in \text{Irr}(G | \varphi)$ に対して $\chi(\sigma_f) \neq 0$ である。また $e_\varphi \sigma_f$ が $e_\varphi \mathbb{C}G$ の unit であるための必要十分条件は、任意の $\xi \in \text{Irr}(G | \varphi)$ に対して $\xi(\sigma_f) \neq 0$ であることである。したがってこれを示せば良い。

可換性から $G//H$ はアーベル群で、 $\text{Irr}(G//H)$ も自然にアーベル群の構造をもつ。Theorem 4.3 より $\text{Irr}(G//H)$ は $\text{Irr}(G | \varphi)$ に作用する。この作用が transitive であることを示す。 $\chi \in \text{Irr}(G | \varphi)$ を含む軌道を U とする。

$$U = \{\chi\tau \mid \tau \in \text{Irr}(G//H)\}$$

である。 χ の stabilizer を Stab_χ と書くことにする。このとき

$$\begin{aligned} e_U &:= \sum_{\eta \in U} e_\eta = \frac{1}{|\text{Stab}_\chi|} \sum_{\tau \in \text{Irr}(G//H)} \frac{m_\chi}{n_G} \sum_{k \in G} \frac{1}{n_k} \overline{\chi \tau(\sigma_k)} \sigma_k \\ &= \frac{1}{|\text{Stab}_\chi|} \sum_{\tau \in \text{Irr}(G//H)} \frac{m_\chi}{n_G} \sum_{k \in G} \frac{1}{n_k} \overline{\chi(\sigma_k) \tau(\sigma_{kH})} \sigma_k \\ &= \frac{m_\chi}{n_G |\text{Stab}_\chi|} \sum_{k \in G} \frac{1}{n_k} \overline{\chi(\sigma_k)} \left(\sum_{\tau \in \text{Irr}(Z//H)} \overline{\tau(\sigma_{kH})} \right) \sigma_k \end{aligned}$$

となるが $k \notin H$ (すなわち $k^H \neq 1^H$) のとき σ_k の係数は 0 である。よって $e_U \in CH$ となり e_φ が CH で primitive であることから $U = \text{Irr}(G | \varphi)$ である。

したがって $\text{Irr}(G | \varphi)$ の任意の元は $\chi\tau, \tau \in \text{Irr}(G//H)$ と書けて

$$\chi\tau(\sigma_f) = \chi(\sigma_f) \tau(\sigma_{fH}) \neq 0$$

となる。 □

Remark 4.4. 証明から、可換の場合には $e_\varphi \sigma_f \neq 0$ ならば $e_\varphi \sigma_f$ が unit であることが分かるが、非可換の場合にはこれが成り立たないような例がある。

この Lemma よりただちに Z が closed subset (すなわち $Z//H$ が $G//H$ の部分群) であることが分かり、また $e_\varphi CG$ が $Z//H$ の $e_\varphi CH$ 上の crossed product であることが分かる。よって以下の結果を得る。

Theorem 4.5 (Clifford Theorem for Commutative Schemes). (X, G) を可換アソシエーションスキームとし H を G の strongly normal closed subset とする。 $\varphi \in \text{Irr}(H)$ に対して

$$Z//H := \{g^H \in G//H \mid e_\varphi C(HgH) \neq 0\}$$

とおく。このとき次が成り立つ。

(1) $\xi \in \text{Irr}(Z | \varphi)$ を一つ固定すれば

$$\text{Irr}(Z | \varphi) = \{\xi\tau \mid \tau \in \text{Irr}(Z//H)\}$$

である。

(2) $\text{Irr}(Z \mid \varphi) \rightarrow \text{Irr}(G \mid \varphi)$, $(\eta \mapsto \eta^G)$ は全単射である。ここで $g \in Z$ に対しては $\eta^G(\sigma_g) = \eta(\sigma_g)$ であり、 $g \notin Z$ に対しては $\eta^G(\sigma_g) = 0$ である。

(3) $\chi \in \text{Irr}(G \mid \varphi)$ の重複度に関して

$$m_\chi = \frac{n_G}{n_Z} m_\varphi$$

が成り立つ。

この結果の簡単な応用として以下を得る。

Corollary 4.6. (X, G) を可換アソシエーションスキームとし H を G の strongly normal closed subset とする。このとき

$$|H| + |G//H| - 1 \leq |G| \leq |H| \cdot |G//H|$$

が成り立つ。特に $|H| + |G//H| - 1 = |G|$ となるための必要十分条件は G が H と $G//H$ の wreath product となることであり、また $|G| = |H| \cdot |G//H|$ となるための必要十分条件は G の隣接代数が crossed product となることである。

References

- [1] C. W. Curtis, I. Reiner, Method of Representation Theory with Applications to Finite Groups and Orders, vol. I. New York Wiley, 1981.
- [2] E. C. Dade, Group-graded rings and modules, Math. Z. 174, 241 – 262 (1980).
- [3] A. Hanaki, Character products of association schemes, preprint.
- [4] A. Hanaki, Representation Theory of Association Schemes, <http://math.shinshu-u.ac.jp/~hanaki/dvi/lecture.pdf>, (in Japanese) 2004.
- [5] A. Hanaki, I. Miyamoto, Classification of association schemes with small vertices, <http://kissme.shinshu-u.ac.jp/as/>.
- [6] P.-H. Zieschang, An Algebraic Approach to Association Schemes, Springer-Verlag, Berlin/New York, 1996.